

ソ連軍隊とが私達日本人住宅を取りかこんだ。すきを見て山に逃げ、ぼう然としているところまで中国人が追いかけてきて、マサカリを振りあげたのを止めさせようとする日本人のお母さん、ここから恐怖の毎日が続くのである。

つぎの日、わが家にもどり、かくしておいた財布と衣類をいそいで持ちかえった。四、五日後は、土台石だけに、すっかり家ごと消えてしまった。まったく驚きであった。もう住む家もない、食べる物もない、金もない「裸の王様」となり、馬小屋にゴザを敷いて何日か過ごした。

やっと南下するということになったとき、いよいよ日本に帰れると思った。「ああ、翼があったら飛んで帰れるのに」と思ったものだ。屋根のない貨車で出発した。山中にかかると、馬賊とか匪賊が出るのだと聞いていたが、なんとか新京にたどり着いたときは五歳以下の子どもは一人も生き残れなかった。

新京の大きな小学校の校庭がデコボコだった。そこは墓地と化した。

地球上から抹殺されずに、生命あって帰国できたが、ある開拓団の方々は服毒自決されたとか、残留孤児になったとかと思うと胸が引きさかれるのを覚える。戦争はやるべきではない。今日の平和はこのような犠牲の上に立っての平和であることを忘れてはなるまい。まだ戦争はおわっていない。「戦争を知らない若い世代」にこのことをしっかり伝えて行くべき役割が私達にあるということを感じているものである。――北安高等女学校三年在学夏休み中のことであった。

開拓団診療所長そして死へ逃避行

福島県 柴田 正雄

富山県から北海道に移住した働くことしか楽しみのない父と、教育にきびしい母に育てられた。北海道の開拓は不毛の大地を切りひらき、悪戦苦闘の貴い汗の結晶によるものと信じている。私の生家も例外ではなく、豪雪、冷害との苦闘の連続であった。逆境の中で成長するにつ

れ、体験を通じて忍耐力と、努力なくしては何事も成し得ないことを知り、仏教信者なる故、生きとし生けるものは人間、動物を問わず、生命の尊厳を守らねばならぬという心がつちかわれた。

私は叔母の嫁ぎ先の村ただ一軒の医者 of 医務助手として雑役に耐え勉強に励んでいた。望まないのにもかかわらず現役兵として満州に送られ、関東軍独立守備隊第十九大隊に昭和十三年三月に入隊した。昭和十四年八月から十一月まで、ノモンハン事件に山砲隊づきとして出動した。

昭和十五年三月、牡丹江第一陸軍病院に転属し、昭和十六年三月、同じ病院を除隊した。除隊後は、新京の満州国立大学の一下級医務技術員として働きながら勉強し、満州国立医学員の入学資格試験に合格した。昭和二十年三月、満州国立龍井医学院を卒業した。さっそく、昭和二十年四月、三江省富錦県公医として、筆架山開拓団診療所長に就任した。勤務中予期せざる敗戦となり、妻は先発隊として引揚げた。私は後発で団員と共に死の逃避行を体験した。

列車はジャスムを通り、ハルビンに入り、新京には九月下旬に到着、解散が許され、人心地がついた。私は、赤十字の腕章をし、奥地の情報収集につとめた。

昭和二十一年十月、新京市曙町に曙町診療所の開業が治安当局に認められ、赤十字マークを窓という窓につけた。昭和二十一年二月十七日朝、はげしく窓をたたく音で目をさまし、姉がおそるおそる外に出たら、しばらくせきを切ったような泣き声となったので驚いて飛び出してみた。みると、髪を短くして男装した妻の姿があった。しばし声も出さず、ただ見つめあうばかりであった。妻は国境付近で日本軍隊に救われ、お寺の婦人と看護婦の仕事をし、昼は草原にかくれ、夜間の行軍にも耐え、方正県に到着した。昭和二十一年一月方正を出発、ハルビンで収容生活をしながら新京までの旅費をつくり新京に到着したのだ。

昭和二十一年九月、新京から引揚げ、十月博多へ上陸帰郷した。その後、僻地医師、北大内科研修医、町立診療所長（二か所）道立保健所長（二か所）となった。札幌市に日中友好帰国者後援会設立、会長となり、北海道

友愛日本語学校開校、北海道中国帰国孤児定着促進センター所長などの役を引き受け、活動している。

あこがれの満鉄に入り十三年、そして敗

戦

福島県 渡辺 忠

昭和七年五月、故郷を離れて渡満の途につき、五月十三日、安春線の宮原に到着し、駅をおりて、満州での第一歩を記した。当時宮原駅の助役をしていた叔父を頼って渡満した私の夢は、叔父同様満鉄に入ることだった。昭和九年九月、入社試験にパスして、奉天列車区に配属となり、九月十六日初出勤した。満鉄社員としての苦勞の始まりである。

昭和十三年五月、車掌拝命。満鉄現場の花形といわれた車掌になって、天にものぼる心地だった。運転車掌、客扱車掌として連日列車乗務に専念した。

昭和十四年三月、安奉駅の橋頭列車区に転勤となり、

橋頭に移住。安奉線の奉天、安東間が乗務区間だった。当時安奉線周辺は、匪賊が出没して治安状態が悪く、そのため、関東軍の独立守備隊が駐屯していた。同年八月、守備隊の装甲列車に一月間乗務を命ぜられ、兵隊さんと起居を共にしたこともあった。

昭和十五年九月、広沢登茂子と結婚。本溪湖市宮原区の満鉄住宅に入居した。ここで三人の子どもが生まれた。初めての土地で、妻には苦勞のかけどおしだった。

昭和十六年十二月、列車乗務から内勤車掌となり、交番係として勤務することになった。戦時ダイヤで、そのうえ、二か月ごとにダイヤは変更され、一日一日が苦勞の連続だった。昭和十七年に橋頭列車区はなくなり、宮原列車区となって独立し、いっさいを宮原に移転した。

昭和二十年七月一日付で、南新京駅助役を拝命、家族を宮原に残して単身赴任した。駅の勤めは初めてだったので、勉強させられた。昭和二十年八月六日、広島に原子爆弾が投下され、一瞬にして焼け野原となり、数十万人の貴い人命が犠牲になったとのニュースを聞き、戦争の末期を思い知らされた。